

しばしばその哲学的根拠として引き合いに出すハイデガーの *sorge* は存在論的な概念であって「他者への深い思いやり」(p. 155) を意味するものでなく、この意味において「顕在化」するものでもない。非西欧と西欧(西洋思想)の隔たりを強調しすぎることで、アフリカの他者性が際立っているのではないか。「他者(第三世界)研究」とみなされては、この本の魅力は十分に伝わらない。本書の魅力は、「ふつうの」人々の視線、対面行為というミクロなレベルから従来のもののやり方を省察する際の、地続きの視点を開示するところにあると思うからである。とはいえ、調査地の人々への誠意と、徹底的に経験に根差した思考によって(特にコラム④から続く結論での考察は秀逸である)、本書は魅力的な民族誌となっている。都市部へも調査の範囲を広げている著者が、今後アフリカと我々の関係をより動的に描き出してくれることを期待してやまない。

鈴木佑記、『現代の〈漂海民〉—津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん、2016 年、348 p.

和田理寛*

漂海民、家族で船上に暮らし零細な漁業で身を立てながら海を漂う人々。狩猟採集だが主食等は陸地社会に依存し、商品となる海産物を採捕して市場と繋がる。この独特な生活様式は、瀬戸内海や九州から中国南部、東南

アジア島嶼部、インドシナ半島西岸に面するアンダマン海まで広がる。本書が取り上げるモーケンは、このうちアンダマン海にて、北はメルギー諸島から南はタイ・マレーシア国境周辺まで、海と島々を移動し生活してきた人々である。まとまったモーケン研究書としては、本邦では宣教師ウアイトの邦訳本[ウアイト 1943 (1922)]に続く刊行となる(本書の基になった鈴木[2011]を除く)。また、著者自らモーケンと生活を共にし、ナマコ採捕の体験などを通して書かれた質感豊かな民族誌である。

本書を読んで浮かび上がるのは、外部社会の影響を受けやすい漂海民の姿である。英領ビルマ時代のモーケンは家船での移動生活を送りながら、一方でマレー人の海賊から逃れ、他方ではナマコやツバメの巣、夜光貝などを捕まえて華人やマレー人の商人との物々交換に携わってきた。戦後は鉱山労働や真珠母貝の採捕にも従事している(本書第 5 章)。さらに現在は、漂泊生活をやめ、他地域の漂海民と同様、陸地への定着が進んでいる。そのため、第 6~13 章は、モーケンのような経緯で定住し、いかに外部社会の影響を受け、またそれに対応しているか、という内容が中心である。

ならば今や漂海民ではないではないか。そうした現実との齟齬を考慮して、本書は「海民」という言葉を代わりに用いると主張する(本書第 2 章)。ただ、評者としては、海民では対象が広すぎる感もあると思う。過去との連続性を意識した漂海民という名称を用いるか、それとも実態に即して漂海民という枠

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

組みを解体するか、これは今後も悩ましい課題であるかも知れない。その葛藤を示すかのように、本書のタイトルには山括弧つきで漂海民の三文字が表れている。

以下、本書の内容を概観しよう。この本は2つの研究の系譜に身を置いており、1つが災害の人類学、もう1つが漂海民研究である。第1章と第2章はそれぞれの先行研究レビューでもある。本書第8章以降は、両系譜が重なり合って、災害後の長期的な影響下に置かれた漂海民社会が描かれていく。ただし、学術的な貢献の大きさでいえば、どちらかという、(漂)海民研究として本書を捉えたほうが適当かも知れない。もちろん、災害や観光をめぐる研究としても本書は魅力的だが、本書「はじめに」でも述べられているように、著者自身の本来の関心もまた特殊な生活様式をもつ漂海民にあったという。

このあと本書では、民族誌の前に3つの章が設けられており、いずれも文献渉猟に基づく優れた内容である。第3章は海域研究の意義やアンダマン海域の特徴、第4章は民族名称を軸とした英語圏とタイ語圏におけるモーケン研究のレビュー、第5章は資料と聞き取りに基づいた定住以前のモーケンの歴史について述べており、どれも当地の海民の概要として有用である。

現地調査の成果は第6章以降であり、タイのスリン諸島を舞台としたモーケンの陸地定着期の過程と実態が詳しく取り上げられている。なお、このスリン諸島はすぐ北方にビルマ領の島を臨む国境地域でもある。さて、タイのモーケンは既に陸地定住へと移行した

とされるが、その経緯はいかなるものだったのか。第6章によれば、定住の導因は1980年代以降におけるタイ領アンダマン海域各地の海洋国立公園化であり、これ以降、国立公園内では自由な木材伐採や漁撈活動が禁止された。さらに同じ頃、錫採掘と真珠養殖業の衰退とともにタイでは観光産業が台頭し、スリン諸島にも1986年から観光客が訪れるようになったため、国立公園事務所での雇用や観光業に従事する者が増えていったという。ただし、第7章で明らかになるように、実際は国立公園の区域内でもモーケンによる小規模の漁撈活動が黙認されており、なかでもナマコ採捕は現金収入のために重要である。また、このナマコ採捕は、これまで海の穏やかな乾季に行なわれてきたのに対し、自然より社会の影響が増したというべきだろうか、現在では国立公園が閉鎖され観光客がいなくなる雨季にのみ黙認されるようになったため、漁撈時期が全く反転するという現象が生じているという。

2004年12月にインド洋津波が起これと、被災地では、その直後の被害に留まらず、長期的な社会の変化もまた経験することになった。第8～13章は、この津波以後におけるスリン諸島のモーケン民族誌であり、なかでも第9章と第10章が秀逸である。第9章は家船や定住後の杭上家屋を通してみえてくるモーケン社会とその変化を描いている。津波後は住居再建の行政支援が行なわれたが、それは当該社会への理解を欠くものであった。2ヵ所の村落は1つに統合され、床は風通しの悪い合板に代わり、モーケンの好む潮間帯

の家屋建築も禁止された。さらには居住者数を無視した同じ大きさの家屋が格子状の配列をなして整然と建ち並ぶことになった。これはモーケンにとって、汀線からみたとき手前と奥に立つ家屋の位置がびたりと重なってはいけないという禁忌に触れた「悪い家屋」であった。しかし、モーケンもただ従ったわけではない。2005 年、2007 年、2008 年における家屋の位置の変化を示した図からは、再建に伴って、モーケン世界では秩序であるパラバラの配置へと徐々に変わっていく様子が一目で見渡せる。効率や整然さを追い求める行政の都合を、伝統があざ笑うかのような象徴的な出来事である。

続く第 10 章は、調査地におけるナマコ採捕の実態を明らかにしている。当該社会では生息場所の異なる 25 種類を潜水によって採捕しているが、毎年浅いほうから深いほうへと徐々に採り尽していき、漁に適した潮汐もこれに応じて変化する。ところが近年は枯渇の時期が早まっている。この原因が津波後に民間団体から多くの船が寄付されたことによる船体数の急増である。これを受け、ナマコの個体数を管理する国立公園事務所は採捕禁止の通達を早めるが、モーケンは監視の目の行き届かない時期や場所を上手く利用することで禁止通達後も採捕を続けている。さらに、より深度をかせぎとう長い鉤を開発したり、仲買人から酸素を送る潜水用具を譲り受けて貸し出しを始めたたりする者が現れている。この章では、ナマコの生態、その保全管理、潮汐のリズム、支援物資の船といった、自然と社会によって織り成されるモーケンの

猟の実態と変化が見事に描き出されている。

詳しくは省くが、続く第 11～14 章では、決して円滑とはいえない国立公園事務所との関係や、違法な越境活動、それに国籍付与などが取り上げられている。

以上が本書の主な内容である。ところで評者はタイとビルマの平地に住む他の少数民族について調べてきた。この立場から本書の重要性を述べれば、それは端的に陸域研究に対する海への誘いである。もちろん本書第 3 章が述べるように、陸域と海域の対比を政治空間に由来したものとして批判したうえで、国家と周縁という対比に置き換えることもまた有用であろう。しかし、これは既にある周縁民族や（漂）海民研究のもつ意義と変わらないし、国家の大局的動向を捉えた議論との間に不毛な対立を生み出しかねない。加えて、国家論として統治制度、宗教、文化などを対照するうえでは、東南アジアの大陸部と島嶼部の区分が有効な場合もある。むしろ、モーケン研究は、大陸部にある海域として、両地域の研究の「舟」渡し役となることが期待される。例として、政治単位を外枠とした、本邦のタイ研究を考えてみよう。すると、『タイの事典』[石井 1993] になかった「モーケン」の項目が、その後、本書著者の筆で『タイ事典』[日本タイ学会 2009] に加わっていることが分かる。本書はタイやビルマの研究者を今後ますます海域や島嶼部へと誘い出し、また海域から陸を見直す契機をもたらすだろう。たとえば、歴史において、零細な漁民が陸地国家の干渉を受けずに華人市場と繋がっていた可能性など興味は尽きない。

一方、漂海民研究の文脈では課題もあろう。たとえば、先駆的な実地調査として有名な野口 [1987] は、かつて家船生活であった長崎の集落について、過去の生業との連続性を踏まえながら、集落内外の社会関係を実に生き活きと描いている。これに対し本書は社会関係や宗教の描写が少ない。婚姻関係、陸地との接点、ナマコ仲買人とは誰かといった点も不明なままである。こうした側面は、近隣の陸地社会との対照や、他地域の（漂）海民との比較のためにも有意義であるに違いない。なお、今後は海域研究者が本書を評し、より専門的な議論へと展開することを強く期待したい。

漂海民研究の先駆けである羽原 [1963] や上述の野口 [1987] では、既にモーケンへの関心が示されていた。しかし、本邦では、その後、東南アジア島嶼部のサマ研究などが盛んとなるものの、モーケン研究については本書著者の登場を待たなければならなかった。その意味で本書はまさに待望の一冊である。さらに近年、本書著者は「水のゾミア」を論じることで、大陸部山地と海域とを比較する可能性も示唆している [鈴木 2016]。本書の対象とする「島モーケン」の人口はわずか 2,800 人、そのうちタイ国に住まうのはわずか 800 人程とされ、しかも既に漂海生活を送っていない。しかし、このアンダマン海の小さな（漂）海民は、今後、著者の活躍を通して、瀬戸内海から、スルー海、そして、ビルマの山地民までを繋ぎ合わせる、意外にも大きな役割を果たしてくれそうである。

引用文献

- 石井米雄監修. 1993. 『タイの事典』同朋舎。
 ウァイト, W. G. 1943 (1922). 『漂海民族—マウケン族研究』松田銑訳, 鎌倉書房。
 鈴木佑記. 2011. 『資源化される海—先住民民族モーケンと特殊海産物をめぐる生態史』上智大学アジア文化研究所。
 ———. 2016. 「水のゾミア試論—東南アジアの海民を事例として」『東南アジア研究』54(1): 117-126。
 日本タイ学会編. 2009. 『タイ事典』めこん。
 野口武徳. 1987. 『漂海民の人類学』弘文堂。
 羽原又吉. 1963. 『漂海民』岩波書店。

椎野若菜・的場澄人編. 『女も男もフィールドへ』(FENICS 100 万人のフィールドワーカーシリーズ 12) 古今書院, 2016 年, 226 p.

佐々木綾子*

本書を含む「100 万人のフィールドワーカー」全 15 巻は、「好奇心旺盛なフィールドワーカーたち」が巻ごとのトピックにもとづき、自らの経験をフィールドワークに関心をもつ幅広い層に向け記したシリーズである。

他の巻が「これから調査を始める人」や「災害調査にかかわる人」など、研究者を読者に想定しているのに対し、本書はフィールドワーカーが自分の性（ジェンダー・セクシュアリティ）やライフイベントについてどう迷い、選択し、行動しているのか、ということに焦点をあてた「ロールモデル集」であ

* 京都大学大学院農学研究科